

二葉

東京支部だより

令和4年秋季発行 第27号

題字：今井綾子(高女28回)



支部長挨拶

すばらしい同窓生に囲まれて

東京支部長 内田眞理子(高校29回生)

6月下旬に気象庁が相次いで梅雨明けを発表したあと、今夏は記録的な猛暑となりました。諏訪地方のさわやかな空気のなかで育った私達にとって、まわりつくような暑さ、湿気は何より辛いのではないでしょうか。この冊子がお手元に届く頃は秋風とともに、コロナ、そして嫌な戦争が落ち着いていてくれることを切に祈る日々です。

前置きが長くなりましたが、今年の11月4日に、元東京支部支部長の濱田真由美様(高校24回生)ご逝去との悲しいニュースが飛び込んできました。現役でお仕事をされていた濱田様ですが、役員対象の回生となり、支部長就任を懇願されるや、持ち前の行動力とリーダーシップで次々と懸案事項に立ち向かわれました。お料理が得意でフラワーデザインにも長じ、おしゃれで豪華な雰囲気をお持ちの方でしたが、しかし何より魅力的であったのは、いつも前向きで、誰に対しても正直で、人を大切にするという心根であったと思います。闘病生活を支えら

れたご主人様にもこの活動にお心をお寄せいただき、過分なご厚志を頂戴いたしました。濱田様の同窓会への責任感と愛情の足元にも及びませんが、このような先輩がいらしたことを誇りに思っています。

一方で、同窓会支部役員の確保には相変わらず苦労していることをお伝えしなければなりません。無理しても引き受けてくれた役員には感謝しかありませんが、皆さん、仕事、介護、家庭の重要な担い手として活動をしています。その姿を頼もしく感じる一方、活動内容を見直し、負担を軽減していく必要があります。そんな中、13回生の方々から傘寿の記念品ご辞退とのご連絡をいただきました。お互いに負担を軽くしていきたいという大先輩からのご提案にも感謝しつつ、コロナ禍の中、せめてこの冊子をお手に取っていただき、同じ学び舎に通ったあの頃を思い出して、少しでも胸がキュンとするようなひとときを感じていただけたら幸いです。



「すわ湖」

織田梓(高校31回生)日本画家
1984年 多摩美術大学絵画科日本画専攻卒業(堀文子教室)、1986年 同大学院修士課程修了。
諏訪地方の花や風景を題材にした作品も多い。



諏訪市長

金子ゆかりさんに聞く

高校29回生の諏訪市長、金子ゆかりさんにお話を伺った。

のびのびと楽しかった二葉

先生方との信頼関係があった

二葉出身で市長になられた金子さんが、どういう高校生活を送り、何に出会って来られたのか、お伺いするのを楽しみにしていました。

二葉のときは、すぐくのびのびしていました。先生方は、きゃぴきゃぴの子たちを上手に教えてくださいました。

たとえ叱られる時でも、先生方は、見つけて叱ろうというのではなく、「しょうがないなあ。気持ちもわかるけど、俺の立場では怒っとくぞ」、私たちも、「許していたら先生の立場がないから、叱られます」という、お互いの間合い、信頼感のよ

うなものがありましたね。

お世話になった先生、印象に残る先生はどなたですか。

担任の「家老」こと坂口武夫先生にはお世話になりました。それからイケメンでファンが多かった中島森利先生。日本史の征矢鑑先生はお話が面白くて、授業が楽しくて。

私たちの学年同窓会は高校29回卒だから「高29（こうふく）会」と名前をつけて、当時の先生方もお招きしてコロナ前に何回か開催しました。そこでお会いした際、征矢先生が「市長になって大変だろ？後悔してないか？」って言ってくださったの。優しいでしょ。そういう先生たちがたくさんいてくださった。

でしたね。

生徒会長として自主独立の気風を受け継いで

生徒会長をされていましたね。二葉祭の後に生徒会の選挙があったので、3年生の時に生徒会長になりました。

私が生徒会長の時に教室で盗難事件が起きて、その対応を、「生徒の中で起きたことなので、私たちにやらせてください」と、全校集会を開いた。それは二葉の自主独立の気風、伝統ですね。「自主・努力・感謝」は、今でも大事にしています。

選択科目が書道だったことも今の糧

ところで、選択科目はなんでしたか。

私は書道だったんです。上水流和男先生。

市長だからいろいろ書く機会があるのではないですか。

毎年お正月に、6市町村長が今年の一字を書くという新聞社の企画があり、色紙に書くんです。この「一字」は就任以来ストリーがあるのはじまりは開拓の「拓」。基礎を作る「基」、基礎固めをしたら平らにして「平」。次は、令和の時代がひらくという意味で「開」。扉の先に進もうと「進」。翌年はコロナ禍を克服する「克」。そして今年は「推」。推しメンとか推し活の「推し」です。諏訪を「推しだね！」と皆に言っただけでいいですね。

高校時代にもっとまじめに習っていたら、今の赤面と苦痛はもう少し和らいでいたかも。



二葉時代の金子さん



姉も通う二葉の、赤いネクタイに憧れて

金子さんはなぜ二葉に？

中学の担任に清陵に行く？と聞かれたけれど、私は二葉に行きたいと志願したんです。2つ上の姉が二葉で、同じ高校がいいと思ったのと、あの憧れの赤いネクタイが締めたくて。

標準服は入学式、修学旅行、卒業式ぐらいしか着ないけれど、やっぱり着たかった。

飾らず自由に

二葉は男の子がいない分、みんな飾らない、地のままでした。この写真（次頁上）のように大根足を出してね。

二葉祭。私はお祭りが好きなので、実行委員になりました。二葉祭は清陵高校がすこやかかの像にブラジャーとふんどしをかけることが恒例で、それを見張って、追い払うのは役員の役目でした。でも遅くまではいらなくて、朝来たらちゃんといていてね。面白かった。いい時代

諏訪に戻るといふ決断

家族、人と人のつながりで今がある

金子さんは東京の大学（慶應義塾大学）に進学されたけれど、諏訪に戻られました。なぜ諏訪に戻ろうと思われたのですか。

大学卒業後、東京の（株）服部セイコー（現、セイコーホールディングス（株））で13年半勤めました。戻るときは母の病気です。仕事は面白くて、後ろ髪を引かれましたが、親孝行は今しないと後悔するって考えて、決心したの。36歳の時です。

家族で頑張りましたが、半年ほどで母は亡くなりました。

このころ父は議員で、母は秘書を兼ねていましたので、母の代わりに選挙などを手伝ったことが、今に繋がるきっかけになっています。

志向したのではなく、いろいろなタイミングがあったのですね。

大学は法学部政治学科。周りの方に推していただいて。また、女性議員を出そうとする追い風もありました。田中康夫氏県知事時代に落選し

たことは、経験しようとしてもできない貴重で面白い経験でしたが、当時は大変でした。

大学院にも行かれましたね。

充電期間に、地方行政を勉強し直そうと考え、専門職大学院（早稲田大学大隈記念大学院）で公共経営学を学びました。今もそこでいただいたご縁や、そのネットワークに支えられています。

大根坂プレート



大根坂の水路の溝蓋には「大根マーク」が。平成12年頃、建設課の担当職員が、同僚であり友人である二葉高校卒の職員から大根坂の話聞き、お金をかけずとも地元の人たちに親しんでもらえることを、と発案したものだそう。（諏訪市役所秘書広報課 課長 細野洋子さん談）



受け継がれている二葉の伝統

時代ごとの個性を持って、らしさを受け継ぐ

—二葉は、今は共学ですね。

県議会議員時代、先輩方などに声をかけて県庁内二葉同窓会を立ち上げました。議員時代の功績です(笑)。県庁には男子の後輩もいて、頑張つてなどと声をかけましたよ。また、諏訪市の秘書広報課長細野さんは、二葉の男女共学の1期生なんです。

—先輩方にお会いすることは？

二葉の同窓会の理事会は、何十人も理事の皆さんが、皆んな宿題をやってきて、会議が気持ち良くパン

パンパンと進むんです。一般的な会だとうはいきません。二葉の先輩方は90歳になっても存在感があり、しゃきつと背筋が伸びていらっしやる。素敵だと思います。

—私たちは男子の卒業生にまだなかなか会う機会がありません。

共学になってからの方たちは、今まだ子育てや仕事が忙しい世代。少し余裕ができたら懐かしい思いを持って集まるのではないでしょうか。それぞれの世代の特性は時代が作るもの。それぞれの良さがあり、お互いに個性を認め合っていく二葉は続いているのだと思います。



金子ゆかり (かねこゆかり)

1958(昭和33)年8月28日諏訪市生まれ。城南小学校、上諏訪中学校から諏訪二葉高等学校。29回生。3年次生徒会長。2015年5月諏訪市長に就任。現在2期目を務める。

インタビューは2022年7月15日に諏訪市庁舎で実施しました。/インタビューア:栗林理恵(高校31回生) 松村佳代(高校31回生)



金子さんが好きなもの

■漬物

推しは『上野大根』のたくあん。豊田の上野区に昔からあったが交雑してしまった「上野大根」を信州大学の先生と原種に戻し、ブランド化。写真:諏訪上野大根沢庵 ぬか漬け [松尾商店] <http://www.matuo.net>



■音楽

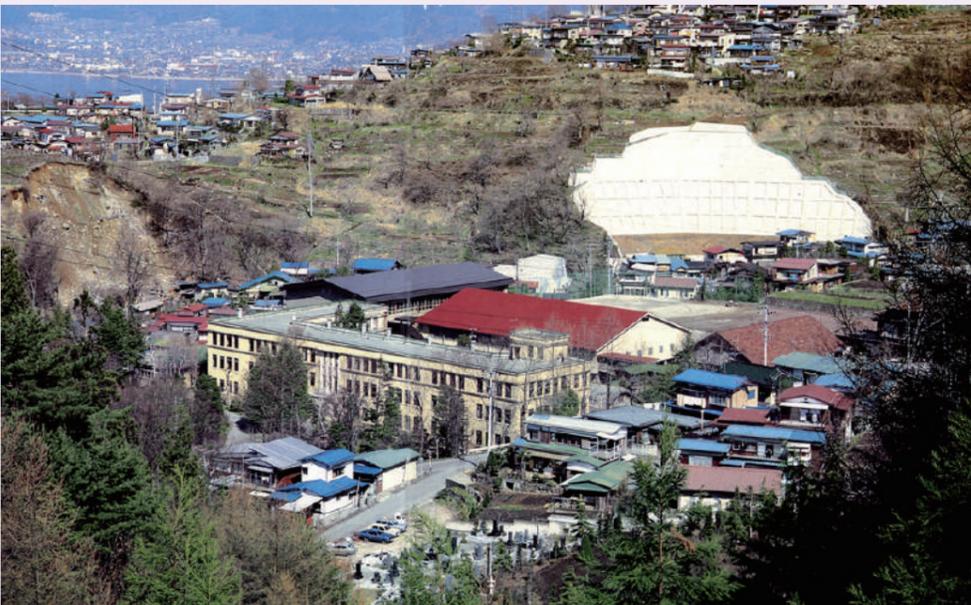
高校3年間器楽部でギターを弾いていました。大学時代からサザンオールスターズが好きでカラオケでも歌います。「原坊に似ている」と言われたことも。うふ♡

■お祭り

歴史上初めてトレーラーで運搬した今年の御柱祭。でも宮川の水はかけないと、と、橋の上から消防ホースでかけることに。気づいたら一番先頭で御水をかけていて、LCVで何度も放映されてしまいました。



懐かしい大根坂から二葉を望む



部品メーカー海外営業から牛乳パン店開業への転身

高校40回生 木村早苗

中目黒に牛乳パン販売店(まるせいゆ東京)を8月20日オープンしました40回生の木村早苗(茅野市出身)です。長年製造メーカーに勤務していましたが、今年4月に起業、菓子製造業へ転身しました。

高校卒業後、将来を案じた父から外国語を身につければ女一人でも生きていける、と台湾留学を勧められ、国立台湾大学へ入学、卒業しました。当時、中国市場が解放され世界のメーカーが注目、参入し、中国語が



話せる人材が重宝された時代でした。携帯電話のプリント基板検査治具メーカーからお誘いを受け、上海9年間、台湾3年間駐在しました。その後、継手・バルブメーカーに転職し東京に戻りました。東南アジアの新規市場開拓の営業を9年行い、華僑が経済を担っている東南アジアでも得意の中国語、懸命に勉強した英語が役立ちました。留学生活、駐在員時代には多くの二葉高校の先輩に出会い、後輩だからと可愛がっていただきました。二葉の卒業生でよかったと感じました。

アジアでは女性の活躍の場が多く、またそのような機会も多く、仕事しやすい環境にあります。将来自分の好きなことをビジネスにできればと夢を持っておりました。そんな中でのコロナ生活。一年の半分は海外に出張していた私は、抜け殻状態となっていたところ、たまに見ていたテレビにマツコ・デ

ラックスが牛乳パンを美味しそうに食べている映像に釘付けになりました。小さい頃よく食べていたな〜懐かしいな〜自分で作ってみたい!と思ったのが2年前です。私は食べることは大好きですが、料理は不得意。この2年間、毎週日曜日に製菓専門学校に通い、ゼロからパン作りを学びました。松本市のパン工場に協力いただき天然酵母を使ったふわふわパンを提供いただき、専門学校で先生にバタークリームを開発していただきました。当初家族・親戚の反対を受けましたが、それでも起業に向けて自分の夢を諦めることができず、目黒区創業塾に参加、店舗探しを一年ほどかけて準備してきました。今では家族・親戚・同級生、友人は私の一番の応援団です。中目黒駅(中目黒銀座商店街)から徒歩2分の4坪弱の小さな店舗は、私の夢の第一歩となりました。店舗「まるせいゆ東京」は父の会社名から借



まるせいゆ東京

住所 東京都目黒区上目黒 2-6-9 マルモビル1-エ
営業時間 11:00-19:00
定休日 火・水
電話 03-5708-5230



りました。

牛乳パンは東京では知名度が低いのですが、長野県民であれば誰でも食べたことがあるソウルフードです。上京し長年東京に住んでいる長野県出身の方に懐かしいなと思っただけの牛乳パンをご提供できたらと思います。ぜひご賞味下さい。皆様に愛されるお店になるよう頑張ります。応援よろしくお願ひします。



卒業後の往復書簡 第一信 「六さん」

高校36回生 杉山恵美

生徒であったのは、あの時間だけではない！と、卒業後も顧問の先生とつながりをもっているクラブ活動も多くあります。ここでは今も絆を楽しんでいる皆さん達の往復書簡を掲載します。



「今年の7月20日に米寿を迎えた」と、二木六徳先生。

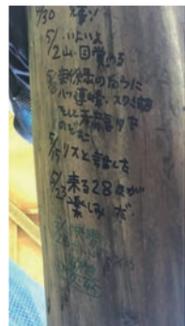
「六さんと一緒に登りたいね。」
誰からともなくそんな話をするようになっていた。四、五年前から元美術部同期で高尾山などに登っていた中でのことだ。山好きで経験豊富なリーダーに誘われ引っぱられるうち、歩く楽しさ、山の気持ちよさに目覚めていった。二木六徳先生（六さん）は言わずと知れた山男だ。先生から登山の話を聞いたことがあったかもしれないが、美術部時代は自分



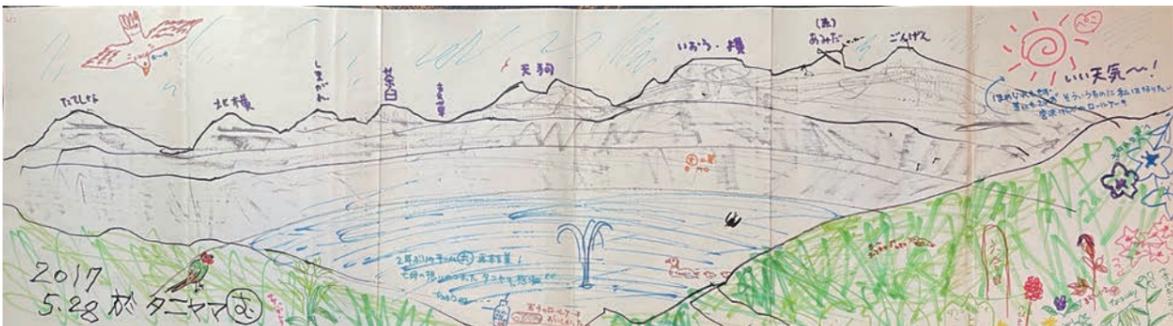
美術部の同期（左から二人目が杉山恵美さん）

も登ろうなどとは思いませんでした。実現したのは2015年6月の入笠山だ。先生にお会いするのも20年振りくらいではなかっただろうか。諏訪在住の二人が連絡を取り送迎などもしてくれた。ゴンドラで一気の上るとちようどスズランが見頃で多くの人が訪れていた。六さんの好奇心が爆発する。すれ違う人の連れた犬、レース状に虫に喰われた木の葉、作業する地元の高校生。気になると声をかけ質問し、ほおーと感心する。あらゆるものへの興味が尽きないその姿こそ、先生の真骨頂だ。山頂までの道はそれなりに険しいものだったが、誰よりも軽やかに登っていく背中が嬉しくなるほどいつもの六さんなのだ。山頂で私たちがちようど50歳になるという話をした時、「50歳は新しいことを始める好機だ。」と言われた。まだまだこれ

から。目の前が開ける思いがした。高校時代で覚えているのは、入学した年に建て替えが決まっていた旧校舎を描いたことだ。それから反核のポスター。絵本づくり。先生の意図や情熱に、打てば響くように応えられた実感はあまりない。けれどあの年代の自分が感じたこと、考えたことの断片が確かに残っている。だから六さんのことは今でも気になるし、忘れない。
二度目の機会は入笠山の二年後、六さんの自宅近くの通称「タコ山」に決まった。先生にとっては庭のような山で景色が抜群にいいと勧められた。5月28日、当日は輝くような晴天に恵まれた。先生の自宅前に集合して出発だ。登山道手前の鳥居に手を合わせる。この日の天候はきつと山の神様の粋な計らいだ。「あいつらに一番の眺望を見せたい」とい



六さんの「一言記」集



タコ山からのぞむ「世界に唯一のパノラマ絵図」

う六さんの思いが通じたに違いない。山野草を見つけながら登っていく。この構図もいだろう、スケッチブックはないのかと言われて焦る。そしてついに。ああこれが六さんが見せたかった景色か。遠くに八ヶ岳その下に諏訪湖、そこから流れ出る天竜川、諏訪のまち。一時、言葉を失くし見入った。

山頂には小さなあずま屋があり、素朴な木のテーブルとベンチがあった。持ち寄った菓子を並べて休んでいると、先生が少し離れた木の陰からニコニコしながら何か取り出してきた。2メートルほどにつなげた紙と色とりどりのペン。皆で描こうと、なんとその日の早朝に運んで隠しておいたらしい。そして八ツの峰々、諏訪湖とスケッチしていく。続きを促され皆で、花や鳥や言葉など思い思いに描き入れた。六先生とかつての教え子たちによる、世界に一つのパノラマ絵図が出来上がった。
ふと見ると、テーブルやベンチにびっしりと文字が書いてある。日付とともに「いよいよ山目覚める、風しきり、天竜の川霧見事」など、登るたび一言記したものらしい。5日前の日付を見つけた。「来たる28日が楽しみだ」先生!!

なりました。しばらく待たされたか、誰にも描きはじめ者はいなかった。そこで六さんは考えた。まず「六さんが」大まかに八ヶ岳と諏訪湖を黒のマゼックで描いて導入にした。蒼々たる山、これが手がかりとなり、それぞれが思い思いの色で鳥や花を描き山には赤岳、阿蘇山、権現などを書き込んでいった。描きながら互いに交す会話の楽しげなこと、大いに盛り上がったよな。
杉山は画面右上に太陽を描いて、夏頃の「ほめられもせず、苦にもされず」というものに私はなりたい」を書き添えたよ。

これは後日、かなり縮小して参加者全員に送った。タコ山の頂上で9人それぞれが描いた絵やことばは、私にとっても何にも替え難い生きた言正となっている。
杉山よ、今度は秋のタコ山だ」と六さんは原稿っている
2022.7.29 文

杉山よ、久しぶりの手紙、うれしかった。今から6、7年前、杉山たちと登った2つの山行きのことを、こんな魚やかに書いてもらえると、米寿のこの年まで生きてきてよかったと実感。
早速、2つめの山行きタコ山の頂上で、みんなで作った2メートルほどの絵を、何年ぶりが、掲げてみた。掲げれば、一孝に魚やかに書いてくる当日のこと。
杉山たち9人を迎える前日の六さんは、あらためてタコ山への下見。そして当日の早朝も頂上まで何回か往復。杉山が言うところの「2メートルほどにつなげた絵」は大きなカレンダーの裏をつまみ取って作った。頂上で「のんヨーグルト」は保冷バックに入れて運んだ。ともかく六さんはみんなの喜ぶ顔が見たくて登ったり下ったりした。
頂上での目撃は、抜群だったよな。文字通り諏訪湖一望。見事な光景に歓声が上がった。この時六さんは、期せずして元美術教師に変わった。用意してあった2メートルほどの紙を掲げながら「この感動をこの紙に描きとどめよ」と。在学中は全員美術部員だったから当然のこと、我先に描きはじめると、いきや人が変わったように静かに

